第一部　和泉式部攷

第一章　『和泉式部日記』考

一　『和泉式部日記』冒頭部試論

はじめに

『和泉式部日記』（以下『日記』）の冒頭歌、

薫る香によそふるよりは時鳥聞かばや同じ声やしたると（日記・一・女／正集・二二六）

は、「宮」の使いで小舎人童が持ってきた橘の花を見た「女」が古歌、

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（古今・夏・一三九・讀人不知）

を想起し「昔の人の」と口ずさんだところで、小舎人童が「宮」への返事を催促して詠じられたものとされている。この和歌について、『和泉式部集全釈』[1]（以下『全釈』）が提示した解釈は次のようなものであった。

橘の薫りに、亡き人をむなしくしのびますよりは、いっそ直接お目にかかりまして、亡き宮と御兄弟に当たられますあなたが、弾正の宮さまと同じお声かどうか、うかがって見たいと思ひますの。

冒頭歌下句の「聞かばや同じ声やしたると」を、「故宮」と「宮」の声が同じか否かを問いつつ、実際は、「宮」の声をお聞きしたいと「女」が誘っていると解されたのである。これは『全講和泉式部日記』[2]によっても支持された。さらに、一歩踏み込んで「直接お目にかかりたい」という積極的な誘いを読み取るものも含めると、この『全釈』が

提示した解釈の方向は、『和泉式部日記』[3]だけではなく、この和歌が入集した『千載和歌集』[4]を含め、多くの注釈書で、現在も肯定的に受け止められている。

しかしながら『日記』を読み進めて行くと、冒頭で提示されているこの大胆な歌を詠じた「女」と、このあと描かれる「女」との間に生じる違和感をどうしても拭うことができないのである。

この和歌を詠ずる直前、「女」は「ことばにて聞こえさせんもかたはらいたく」、「はかなきことをも」と思っている。つまり、「女」は和歌という手段によってこそ返事が許されると考えたのである。ここからはとうてい大胆な誘いの和歌を詠みかけようとする積極的な意思を読み取ることはできない。[5]また、この後、「女」と「宮」が初めて逢瀬を持つ直前の文のやり取りの中で、「宮」が「あはれなる御物語聞こえさせに、暮にはいかが」と問うたのに対し、「女」は、

なぐさむと聞けば語らまほしけれど身の憂きことぞ言ふかひもなき（日記・六・女）

生ひたる蘆にて、かひなくや。（日記・一三頁）

と返している。もちろん、ここで「さあどうぞ」と応じてしまえば、『日記』自体が成り立たないことにもなりかねないが、「声が聞きたい」と「女」自らが積極的に誘ったとするならば、断りの理由に「故宮」への追慕に泣き濡れているとするのはやや不自然な感を免れない。拒絶ではなく、「語らまほしけれど」、語り合いたい気持ちはあるがと応じているところが、いかにも冒頭歌を詠じた「女」らしいという見方も成り立ち得るものの、逢瀬を持った後も、

「あやしかりける身の有様かな、故宮のさばかりのたまはせしものを」とかなしくて、

思ひ乱るるほどに……（日記・一五頁）

と、「故宮」を引き合いに出しつつ、心情を吐露している。このあたりの「女」の描かれ方からすると、「女」が積極的に誘いの和歌を詠じたと断ずることにためらいと同時に違和感を覚えるのである。

冒頭歌に対する返しとして、「宮」は

同じ枝に鳴きつつをりし時鳥声は変はらぬものと知らずや（日記・二・宮）

と詠じており、「鳴きつつをりし」と過去を持ち出して「故宮」を暗示していることは、動かし難い。しかし、それと、「女」の和歌とを同一レベルで論じてよいものだろうか。つまり、「宮」の歌の「同じ枝」が「故宮」の存在をかなり明確に意味しているがために、「女」の歌がこの「宮」の歌に引きずられる形で、理解されているということはないだろうか。

この和歌に付いては、その曖昧性から既に様々な御論[6]がある。本稿では先学の驥尾に付しつつ、一旦この『日記』冒頭歌を和泉式部という人物と切り離し、一首の和歌としていかに解釈できるかという点から考えてみたい。

一　「同じ声」の意味するもの

『日記』冒頭歌が、「宮の声を聞きたい」と解される理由の一つは、「同じ声」という表現によるところが大きいようである。この「同じ声」について『全釈』は、『夜の寝覚』を例としてあげて、「同母を意味する「同じ腹」などの言ひ方があって、それらからの影響であらう」、「兄弟関係にある事をも、又あらはしてゐると解すべきである」とされ、また、小松登美氏[7]も「平安時代「同じ……」で兄弟を示す事が多い。ここも、「同じ声」で、帥宮と弾正宮ときょうだいである点を暗示した」とされた。これに対し、『全釈』の解釈に疑問を呈された、森重敏氏[8]は、